

在野考古学研究者の相沢忠洋とFから思うこと

1 相沢忠洋と岩宿遺跡発見

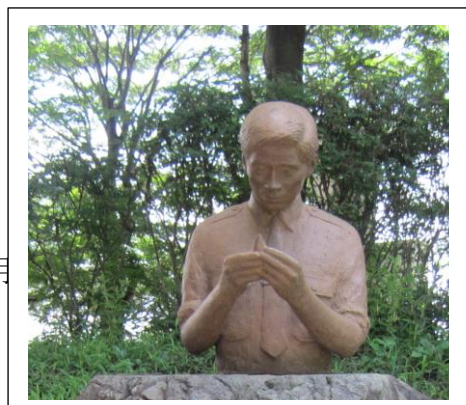
岩宿遺跡は群馬県東部のみどり市笠懸町（旧新田郡笠懸村）にある「旧石器時代」の遺跡。これは日本列島にも旧石器時代があることを初めて証明した重要な遺跡である。そして、この遺跡の発見者が在野（アマチュア）考古学研究者の相沢忠洋であった。

旧石器時代と縄文時代の比較

	旧石器時代（～1万6千年前）	縄文時代（1万6千年前～）
1	旧石器（打製石器）	新石器（磨製石器）
2	土器なし	土器あり
3	遊動生活	定住
4	テント・洞穴など	竪穴住居

（1）相沢の誕生～終戦まで

ア 相沢は大正15年（1926）6月、東京府荏原郡羽田村（現、大田区）に誕生する。父「忠三郎」と母「いし」の長男（二男三女）である。昭和8年（1933年・7歳）に鎌倉（浄明寺御所之内）へ転居する。相沢の住居近隣で軍関係の官



舎建設に伴う地ならし作業が始まり、土の中から土器片が出土する。相沢はその内の数個を貰ったが、その時から土器に興味を持つこととなる。昭和10年（1935・9歳）4

頃、母は子供達（妹2人、弟1人）を置いて突然家から消えた（両親離婚）。数日後、

月
残

(相沢忠洋の銅像)

された子供達は一人ひとり父に連れられていなくなり一家離散となる。相沢は近くの杉本寺（鎌倉市二階堂903）に預けられた。

イ 昭和12年（1937・11歳）6月、父と群馬県桐生市に移る。同年8月東京浅草の履物屋（小宮稻五郎商店）に丁稚奉公をする。日中は仕事をし、夜は尋常小学校へ通った。昭和13年（1938・12歳）5月、休みの日に露店で石斧を見つけたが、小遣いが不足し買えないので粘っていたらタダで貰えた。同年暮れに相沢は上野の帝室博物館（現東京国立博物館）へ出かける。若い守衛の「^{かずの}数野甚造」と知り合いになり、後日、数野宅を訪問し遺跡や遺物について教わった。尋常小学校卒業後、青年学校へ入学する。

ウ 昭和16年（1941）以降になると日中戦争が泥沼化し戦時色が色濃く反映する。昭和18年（1943・17歳）7月、相沢は、青年学校の先生や履物屋の旦那の勧めがあり海軍へ志願する。一旦桐生へ帰り、翌昭和19年（1944・18歳）5月横須賀武山海兵団に入団。3か月の訓練後、横須賀鎮守府で駆逐艦「^{つた}葛（つた）」の艀装員付（ぎそういんつき）となる。

相沢は、大工部門を担当する工員Oと親しくなり、休日は横須賀のO宅へ呼ばれるようになる。3回目の上陸の時には工員の妻もいた。翌朝帰艦の際に工員の妻が途中までついてきたが、その人は9歳の時別れた母であった。

「葛」は出港し山口県南東部の漁港で出撃命令を待っていたところ、8月15日に玉音放送が流れ戦争は終わった。

(2) 桐生移住～岩宿遺跡発見（旧石器時代存否論争）

ア 昭和20年（1945・19歳）相沢は桐生市に復員し、長屋の一人住まいをする。長屋は狭くて粗末な小屋であった。当面は、食料を求めて郊外の村落をまわり買い出しに出かけた。

昭和21年（1946）5月、鎌倉の友人が亡くなったので線香を供えに行きながら、母に会うため横須賀へ向かう。O宅へ訪問し、母とお互いの無事を喜びあっていたが、夫が帰宅してからは一変し冷たい雰囲気となる。Oは相沢の父について絡みつくように問い質すのであった。いたたまれず相沢はその家を抜け出す。

これ以後、母とは二度と会うことはなかった。

イ 買い出しは日々続いていた。また、桐生周辺や赤城山山麓の各地を歩き古代人の生活の後を訪ねては土器や石器を拾い集めていた。夜、蒸かしたさつま芋を食べながら拾ってきた土器や石器を眺めるのが至福の時であった。桐生や赤城山山麓にはいつ頃から人が居住し、その黎明期はどうであったのだろうかを調べたいとの思いから、相沢は独学で考古学を学び始める。また、考古ボーイで中学生の加藤正義、堀越靖久と知り合う。

ウ 昭和21年(1946・20歳)秋、行商(小間物のちに納豆)の帰路に両側が崖で断面に赤土がある場所(新田郡笠懸村の稲荷山前の切道し・後に岩宿遺跡)から石片を採取する。赤土の中から石剥片が出るが土器がないのはどうしてか理解に苦しむ。相沢は、桐生から東京まで自転車に乗り考古学者を訪ねては事実を話したが言下のもとに否定された。当時、赤土のローム層堆積期(火山が噴火していた時期)は動植物が生存しない死の世界であり、当然人も住めないというのが考古学者の常識であったのだ。(赤土の呪い)

エ 3月ぶりに稲荷山前の赤土の崖へ行き調査。そこに黒曜石の尖頭器(槍先型)石器が出土した。素材は黒曜石だが、真黒ではなく全体に透明の部分が多い美しい石材であった。最古の土器文化よりも古い時代の人類がいたのだと確信する。

オ 昭和24年(1949・23歳)7月、仕事で上京の折り、慶應大学の江坂輝弥

のお宅を訪問する。友人の明治大学大学院生の芹沢長介(29歳)が先客でいた。



(岩宿遺跡跡)

芹沢に尖頭器石器について少し話す。後日、芹沢宅へ伺い赤土の崖での事実につき石器を添えて説明。9月7日、芹沢は明治大学考古学研究室に持ち込み、杉原荘介助教授(35歳)に報告する。同月8日に相沢と杉原、芹沢が集まり発掘の打合せをした。同月11日、稲荷山前の赤土の崖で杉原、芹沢、岡本、相沢、そして相沢の助手

で高校生の堀越、加藤の6名が予備調査に着手する。16時から雨。16時50分に

なり杉原が楕円形握槌（槍先形尖頭器・石斧・）を赤土から発見する。これが岩宿遺跡（約4万年前～1万5千年前）であり日本列島に旧石器時代が存在したことを証明したのである。だが、岩宿遺跡の旧石器発見はすぐに認められることはなかった。それは、地質学者の鹿間時夫と高井冬二の二人に地質調査を依頼したところ、当初は二人とも洪積世の終わり（旧石器時代）にあたると認めたが、途中で高井が前言を翻し沖積世に該当し旧石器時代ではないと主張した。これについては、高井に対し某大学の圧力がかかったと言われている。実は岩宿のある桐生市に隣接した栃木県足利郡の普門寺遺跡を某大学人類学教室が発掘していて岩宿のローム層は沖積層と結論づけていたのである。後に某大学側が間違いであることが判明する。

（3）岩宿遺跡発見の後

ア 昭和24年（1949）10月、京都大学で日本考古学協会第4回総会が開催された。そこで岩宿遺跡について速報として発表したが、会場の雰囲気は冷ややかなものであった。一部の学者等からは揶揄（やゆ）や嘲笑（ちょうしょう）すらあった。このように岩宿遺跡を認めない学者等が多かった。

イ 世界でも、直ぐには認められない例は多い。例えば明治12年（1879）、北スペインにあるアルタミラ洞窟で弁護士兼アマチュア考古学者サウトゥオラの娘（12歳）が壁画を発見した。しかし、学界からは画家に描かせたのだろう、詐欺師などと中傷される。サウトゥオラは失意のうちに明治21年（1888）に死亡する。およそ半世紀後この壁画が本物で旧石器時代のものであると認められた。

ウ 日本考古学協会第4回総会后、杉原、芹沢、相沢らは岩宿遺跡の本調査（第1回・第2回）をし、さらに全国各地（東京都板橋区の茂呂遺跡・長野県茶臼山遺跡・長野県上ノ平遺跡等）の旧石器遺跡を発掘調査し、日本列島に旧石器時代・文化があることを証明した。現在では、岩宿時代の遺跡が全国で1万カ所を超えている。

エ 昭和25年（1950・24歳）以降、相沢は群馬県下の幾つかの遺跡（三ツ屋遺跡等）を発見、発掘をする。昭和36年（1961・35歳）岩宿遺跡発見の功績により群馬県功労者表彰受賞。昭和42年（1967・41歳）第1回吉川英治賞を受ける。相沢は有名人になっても依然と変わらぬ質素な生活を続けていた。平成元年（1989・62歳）5月逝去する。

2 杉原と芹沢の対立そして「前・中期旧石器時代存否論争」

- (1) 岩宿遺跡の発掘を共に実施した杉原と芹沢が対立することになる。対立の切っ掛けは杉原が昭和31年(1956)発行の「岩宿遺跡発掘報告書」で相沢を冷遇したことによる。昭和34年(1959)に明治大学講師を辞職した芹沢は、昭和38年(1963)に東北大学日本文化研究所に職を得る。
- (2) 芹沢は日本列島にも「前・中期旧石器時代」は存在するといひ、一方杉原は昭和42年に「前・中期旧石器時代」の存在を否定した。これを「前・中期旧石器時代存否論争」という。背景には杉原が青森県金木での発掘失敗がある。この論争は昭和50年(1975)頃から有効な証拠・論拠も見つからないまま膠着(こうちやく)状態となった。

旧石器時代		
1	前期旧石器時代	約260万年前～30万年前
2	中期旧石器時代	約30万年前～約4万年前
3	後期旧石器時代	約4万年前～約1万6千年前

(平成28年度かながわの遺跡展・巡回展図録参考)

3 Fの旧石器遺跡ねつ造事件

- (1) ア Fは、昭和25年(1950)宮城県に生まれる。私立高校を卒業後、計器メーカーに就職。昭和47年(1972・22歳)宮城県の古川市民会館で「宮城県考古展」が開催され、参加したFは考古学に関心を持つようになった。以後、休日には宮城県北部の丘陵を歩き回り遺跡探しをした。昭和50年(1975)には東北大若手研究者、在野考古学研究者などで「石器文化談話会」(後の東北旧石器文化研究所)が結成されFも参加する。
- イ Fは、昭和55年(1980)宮城県座散乱木(ざざらぎ)遺跡、同県馬場壇A遺跡などから前期旧石器を発見。昭和56年(1981)宮城県座散乱木遺跡第三次調査で4万年に遡る前期旧石器を掘り出した。これらの発掘実績から彼はゴッドハンド(神の手)と呼ばれるようになる。これにより膠着状態であった「前期旧石

器時代存否論争」は幕を閉じた。

ウ 平成12年(2000)11月5日付の毎日新聞朝刊は、東北旧石器文化研究所副理事長Fが宮城県上高森遺跡^{かみたかもり}で旧石器遺跡ねつ造を認めたと報道された。

エ 平成13年(2001)5月、日本考古学協会は「前・中期旧石器問題調査特別委員会」を発足し、Fが関与した遺跡の検証を実施。平成15年(2003)春の総会で、特別委員会から、ほとんどの遺跡にあたる162遺跡にねつ造の判定結果が出される。ねつ造に使用された石器の大半は、縄文遺跡の石器であった。

(2) ヨーロッパにおけるねつ造事件(ピルトダウン人事件)

前世紀初頭ロンドンに、中世人の頭蓋骨にオラウータンの下顎骨を組み合わせたねつ造物(ピルトダウン人)化石が大英自然史博物館へ持ち込まれた。真相が明らかになったのは40年後の昭和28年(1953)であった。

(3) ねつ造の動機

真相はF本人でなければ分からないが、推測するにFは有名になりたかったのであり、第2の相沢になりたかったのが真相であろう。更には「東北旧石器文化研究所」の会員の期待に応えたかったのも少しあるかもしれない。

(4) 被害

このねつ造事件は多くの関係者に被害をもたらした。

ア 日本の考古学界全体の信用失墜を招いた。

イ 芹沢や東北旧石器文化研究所会員に多大な迷惑をかける。

ウ 国や自治体の信用を傷つけた。

エ 地方の地域振興事業を台無しにした。

○ 宮城県築館町：上高森遺跡 ⇒ 原人饅頭・原人ラーメン・原人日本酒・原人マラソン ○ 埼玉県秩父市長尾根・小鹿坂遺跡 ⇒ 前期旧石器フォーラム

オ 聖嶽(ひじりだき)洞穴問題

平成13年(2001)1月、某週刊誌が「第二の神の手」という大見出しで発売された。内容は別府大学学長の賀川光夫が昭和37年(1962)に大分県聖嶽洞穴から人骨とともに出土した旧石器は怪しい(ねつ造)というものである。その後週刊誌が2回発売されたのを受けて、身の潔白を訴えて賀川学長は平成13年3

月自殺。同年11月遺族が週刊誌を相手に民事訴訟を起こし勝訴となった。

4 在家考古学研究者の存在意義

(1) 相沢忠洋とFの実績を踏まえたうえで、以下の理由から在家考古学者は存在意義があると結論するものである。

ア 考古学における遺跡・遺物などの発見、発掘には人力が必要であり、在家考古学研究者は必要不可欠である。

イ 学者・プロ研究者（以下、学者等）は知識があるゆえに固定観念を持つ場合があるし、また学閥の考えなどに拘束されるが、在家考古学研究者は自由な発想ができる立場にいる。

ウ 隙間産業（大企業が進出しない専門的で小規模の市場）のように学者等には向かないが、在家考古学研究者には向く得意分野がある。

(2) 在家考古学研究者と学者等とはそれぞれの役割分担は異なるが、良きパートナーであるべきである。なお、在家考古学研究者はFのような不屈きな行為を決してしないよう戒めなければならないと共に単なる土器・石器収集屋にならないように基礎的知識の習得に努めるべきである。

5 前期・中期旧石器時代論争についての提言

(1) 旧石器遺跡ねつ造事件の発生により、わが国の前期・中期旧石器文化研究は四半世紀戻ることとなった。そして現在、前期・中期旧石器（4万年前以前）時代は無いというのが多数説である。その根拠は、4万年～1万8千年前の一時期、日本列島は大陸とつながっていたが、その他の時期は孤島であった。このため日本列島に来るには海を渡らなければならないが、原人（又は旧人）に航海能力は考えにくい。可能なのはホモ・サピエンス（新人）のみである。しかし、ホモ・サピエンスは10数年前（20万年前説あり）、アフリカで誕生し約5～6万年前（10万年前説あり）にアフリカを出る。そして約4万年前に日本列島に到達した。従ってそれ以前に人や石器はあり得ないという考えである。この考えに縛られ現在の考古学会は何等行動をしていないのである。（**第二の赤土の呪い**）

(2) 私は現在のホモ・サピエンスの誕生・アフリカ出国そして日本列島に到達の時期は絶対ではないと考える。従来から、古い時期へと幾度も更新しているからである。最新の例では、平成30年1月26日の読売新聞朝刊に、「イスラエルから19万年前のホモ・サピエンスの化石が見つかったとの報道があった。これによればアフリカ旅立ちは従来よりも少なくとも5万年遡り20万年前頃の可能性がでてきた。」と記載されている。よって、ホモ・サピエンスが4万年前以前に日本列島に来ている可能性も出てきているのである。

他方、芹沢石器を批判した竹岡俊樹であるが、昭和37年(1962)に大分県丹生(にゅう)遺跡から出た遺跡は20万年前に遡れると主張している。同じく座散乱木遺跡では自然石のみでなく本物の前期旧石器もあると語る。また、同志社大学の松藤和人は星野下層・岩宿D地点から出土した石器には人口品(旧石器)が含まれていると述べている。その他、大分県早水台遺跡から発掘した石斧については、全て自然石と見る論者もいるが、一部は石器との論者もいる。

また、ねつ造事件後の平成14年(2002)長野県竹佐中原遺跡、平成15年(2003)長崎県入口遺跡・岩手県金取遺跡などから中期石器と見られる石器を発見している。これには理化学的技法による年代測定も行われている。

これらを考慮すると、考古学会は現時点でのホモ・サピエンスの渡来時期説を根拠に全てを否定するのではなく、現に前期・中期旧石器であると論じるケースについては速やかに検証を行い、その存否を明確にすべきと提言するものである。

以 上

参考文献等

- 1 「岩宿」の発見 / 相沢忠洋著 / 講談社文庫 / 1987年9月発行
- 2 石の虚塔 / 上原善広著 / 新潮社 / 2014年8月発行
- 3 「旧石器時代」の発見 岩宿遺跡 / 小菅将夫著 / 新泉社 / 2014年12月発行
- 4 赤土への執念 岩宿遺跡から夏井戸遺跡へ / 相沢忠洋著 / (株) 佼成出版社 / 1980年7月発行
- 5 日本列島人類史の起源 / 松藤和人著 / (株) 雄山閣 / 2014年5月発行
- 6 赤城山麓の旧石器 / 相沢忠洋・関矢晃著 / (株) 講談社 / 1989年7月発行
- 7 赤城山麓の三万年前のムラ 下触牛伏遺跡 / 小菅将夫著 / 新泉社・2006年9月発行
- 8 旧石器遺跡捏造 / 河合信和著 / 文春新書 / 2003年1月発行
- 9 文化財報道と新聞記者 / 中村俊介著 / 吉川弘文館 / 2004年3月発行
- 10 旧石器遺跡「捏造事件」 / 岡村道雄著 / 山川出版社 / 2010年11月発行
- 11 旧石器時代人の歴史 / 竹岡俊樹著 / 講談社メチエ / 2011年4月発行

- 12 岩宿遺跡の発見・発掘と群馬の岩宿（旧石器）時代 /小菅将夫氏 /高崎講演 /
2017年8月
- 13 かながわの最初の現代人—旧石器時代のヒトと社会— / 神奈川県教育委員会など編集/
2016年12月発行
- 14 GUIDEBOOK・群馬県立歴史博物館常設展図鑑 / 2017年7月13日発行